

1993年9月15日発行 1975年2月28日第3種郵便物認可
毎月1回15日発行
定価／150円
年間購読料／2,000円
(送料共)

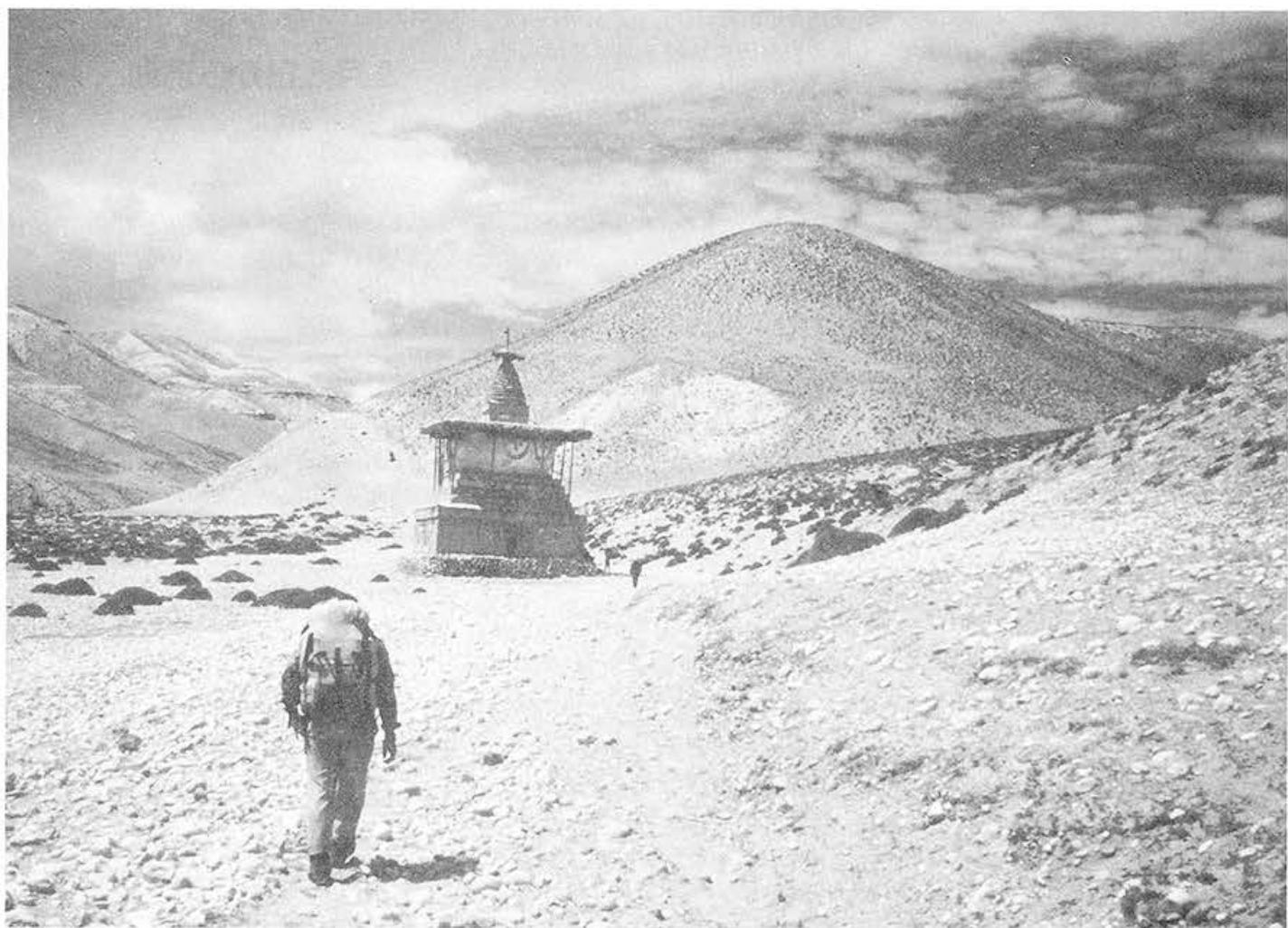
編集／縁の地球ネットワーク
Green Earth Network

大阪市港区市岡元町3丁目9-16 西建ビル
TEL.06-583-1719 FAX.06-583-1739 (番552)
郵便振替 大阪4-128465
COM21 通巻313号 発行／COM企画室

縁の地球 **GREEN EARTH**

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

- ネパール緑化考察団の報告……………P 3
- 黄土高原ワーキングツアーワーク会……………P 4～P 6



はてしなく続くネパール・ムスタンの土漠

1993・9

19

黄土高原の厳しさ実感

槌田 効

(京都精華大学教授・ワーキングツアー顧問)

中国大陆での最初の目覚めは夜行寝台の中であった。深夜に北京を発った列車は蒸し暑く、とても快適とはいえない、寝苦しかったが、眼気のないのはある種興奮のせいなのであろう。窓を少しあけると、さわやかな風が入って生き返る思いであった。

列車は大同へ近づいていた。窓ごしの風景は日本で見なれたものとまるで違っていた。华北は黄土地帯である。低い山につながるゆるやかな斜面をもつ高原は人かけなく、人家もまばらであった。遠く見る大地に緑はうすく、こんもりした森など見ることはできない。そして何よりも目立ったのは水でえぐられてでき上がったのであろう、土の露出する絶壁であった。このような爪跡は車窓を流れ、次々とつづいて切れることができなかつた。黄砂の舞い立つ土地に雨が降り、泥水となって流れるすさまじい風景は、つむった目に浮かび上がって見えるようであつた。

現実は想像よりもすさまじいのであろう。そのことを感じさせてくれたの

は、大同市から渾源にバスで移動する時であった。道路の下に川幅10メートル余りの「谷川」があったが、水は一滴も流れていなかつた。

華北の8月は乾期ではない。雨期である。事実、私たちが大同地方に滞在した数日間、雨のない日はなかつた。山に緑なく、という言いすぎであろうが、ほとんど全く木々ではなく、保水力をもたぬ斜面に、雨は泥流となって流れ去るのだろう。

さらに山道を登ると集落があった。周辺の斜面には段々畠が拡がっていた。日本の山村に見られる猫のひたいのようなみみっちいものではない。大きく広がった空の下、耕して天に至る畠は広々としていた。しかし、土はやせていた。年々耕土は雨に流され、新しくなっているのだろう。根元を洗われて作物は弱々しかつた。

きびしい黄土地帯を見て、日本の緑の豊かさを思い、その豊かさを忘れ粗



緑のない山と水のない川。

末にしている私たちの現実を恥じた。罰当たりなことである。きびしい風土の中で生きる人びとに学ぶべき多くのことがあるにちがいない。彼らにとつて緊急かつ重要な課題は緑化であり、緑化は沿道の標語として随所に見られた。その緑化を緑として、友好を深められればすばらしい。

9月5日から現地へ

中国山西省でこの夏に機構改革があり、緑化協力をつづけてきた雁北地区の各県は大同市に合併されました。9月5日から3~4週間の予定で高見世話人が現地に赴き、今後の協力関係の強化について協議します。そのさいに郵政省国際ボランティア貯金からの助成金を届けることになっています。

GENの会員になってください

緑の地球ネットワークの活動もたいへん忙しくなっています。多くの方が会員になって、これらの活動を支えてくださるようお願いいたします。

●会費（1口1年分）

一般会員 12,000円

家族会員（2人目から） 6,000円

学生会員（高校生以上） 3,000円

ジュニア会員（中学まで） 1,000円

団体会員 12,000円

賛助会員 100,000円

（以上の会費には会報購読料が含まれています）。

●会報購読料

1年分（送料とも） 2,000円

●緑化基金

いくらでもけっこうです。黄土高原につづいてネパールでも草の根の緑化協力がはじまります。みなさんのご協力をお願いします。

GEN学習会 よみがえる六甲山の緑

一六甲山は百年前ハゲ山だった

報告・和田邦孝さん

（神戸市森林整備事務所）

●9月13日（月）18時45分～

●弁天町市民学習センター

（弁天町駅そばオーク2番街7階）

参加費 700円

GEN・自然と親しむ会 北山杉見学とみがき丸太体験

●10月3日（日）10時30分現地集合

●北山杉資料館・グリーンガーデン

（京都市北区小野下ノ町・JR京都駅発9:20のJR高鶴線バス・阪急大宮9:30・資料館前下車）

※雨天決行・弁当持参（食堂あり）

参加費 700円（含保険料）

（丸太細工の実費1500~2500円は別途）

参加申し込みは10月1日までに

黄土高原ワーキングツアー報告会

大きく発展はじめた黄土高原の緑化協力。槌田効顧問・川島和義団長（予定）のほか、若い団員の率直な印象。

●10月14日（木）18時30分～

●大阪市立弁天町市民学習センター

（弁天町駅そばオーク2番街7階）

参加費 500円

ネパール・ヒマラヤを縁に！

ネパール緑化考察の旅を終えて（その1）



GEN代表世話人 佐野 茂樹

前号の稻村昭南さんの報告にあるとおりネパール緑化考察団はたいへん厳しい旅をおえて7月25日に帰国しました。以下は今回の考察の成果の報告です。

厳しい雨期の旅をへて

私たちGENの、アジア自然塾と共にネパール緑化考察の長い旅が終りました。2か月（5月26日～7月25日）に及ぶ行程のうち6月8日から7月6日まではほとんど徒步の旅でした。とりわけ年雨量3500mmをこえる地帯から登り下りをくりかえし、年雨量200mm、高度4000mのムスタンに至り、再び激しい大雨の中にとてかえすという厳しい旅でした。



カリガンダキ川・ムスタン郡サウル村付近

しかし（とくにムスタンでは）自然の過酷さだけでなく、生き物を包みこむ無限の慈みを感じ、また自然環境と調和した歴史・文化のすばらしさに魂をゆさぶられる思いでした。同時に環

境劣化が深刻であり人々の生存基盤が現に今、音立てて崩れていますのが伝わってきました。

実際、私たちがカトマンドゥに戻った7月中旬以降、ネパール各地は激しい水

害に見舞われました。日を追って被害は拡大し、崖は崩れ、道路はズタズタ、大橋も裂断等々。そして9月上旬

の時点で死者は2000人をこえ、さらに増える見込みだとのこと。

こうした体感・経験を、日々流失する表土が年に2.4億トンという危機的事態をたえず念頭において、書き綴りたいと思います。

だが、まずは今回の旅の一つの主要成

果、サウル村での緑化協力に関する合意契約から始めましょう。

ダウラギリ山直下の村

サウル村はムスタン郡南端に近く、ムスタン中央を南流するカリガンダキ河東岸、8167mのダウラギリ山直下、標高は2600m。雨期は南から乾期は北から強い風が吹き抜ける乾燥地帯。タカリー族の人々が住む農村です。

この村の第7区（人口50人～100人）を中心に村政府（Sauru Village Committee=SVC）とGENとの間に緑化に関する合意書



サウル村を離れる前に村人たちと。

が交わされました。（なお合意書はムスタン王国にむかう6月15日調印、王国から帰着後の6月29日に補整を行いました）。

サウル村との合意事項

以下要点を記します。

1. SVCはGENに対し、サウル第7区の土地50ロバニ（2.5ha）を育苗場、オフィスほか植林関連用地として20年間無償貸与する。

2. サウルを貫流しカリガンダキに注ぐタマ川の蛇籠による防水工事にGENが協力する（資金的には50万ルピス＝125万円）。

3. 来年5月には育苗が開始できるよう、それまでに育苗場、オフィス等の建設、また蛇籠工事が4月に着工できるよう、本年末にサウルを訪ねる佐野とSVCが具体的な詰めをする。

これが、第7区の村民全員を前にして、SVCとの間で成立した合意です。署名は村長C. B. ガウチャンさんと佐野、連署人は地元選出代議士O. B. ガウチャンさん、（これまでの重要な仲立ちである）H. D. ツラチャンさん、及び自然塾塾頭稻村昭南さん、GEN世話人東間徳さんです。これが一つの到達点、そして出発点です。GENは何をどのようにして進めるのか、背景を交えてくわしく記しましょう。

（以下次号）

ネパール緑化考察団報告会

きびしかった雨期の徒步行。ムスタン郡サウル村で緑化協力に合意。これらの協力のあり方などを含めて。

●10月19日（火）18時30分～

●大阪市立弁天町市民学習センター
(弁天町駅そばオーハ2番街7階)

参加費 500円

見て、触ってきた黄土高原

黄土高原ワーキングツアーが無事に帰ってきました。嵐を呼ぶ男（女？）がいたとみえ、往路は台風6号、復路は7号と燕京号で各3泊（普通は2泊）するはめになりました。8月2日渾源に入り、3日は西留郷で友誼林のはずれ

の除草作業とアンズの接ぎ芽の見学。4日は恒山・懸空寺の観光、5日は徐町郷で樟子松の小苗を植樹。雲崗石窟、長城、北京、天津を観光して神戸に帰着しました。

参加者数人に感想などを語ってもらいました。

座談会

吉川真弓さん（フリーライター・34歳）
槌田 澄さん（学生・23歳）
角井大亮さん（学生・20歳）
糸 望さん（学生・19歳）
大下るりさん（学生・19歳）
東川貴子さん（司会・GEN世話人）

の手を引いてたり、のんびり商売したり、地域のつながりが感じられる。みんな素朴で、たくましくて、とにかくエネルギーを感じた。

大下●活気がありましたね。中国はこわいとこだ、泥棒に気をつけろなんて吹き込まれ

「僕は運転手だから、これは特別なんだ、医者が知りあいで便宜をはかってくれた、感謝の気持ちを表せ」なんてくりかえす。結局、お金を出せということだった。やっぱり変わってきてるんだなって。

東川●お金ができると、親切心がなくなるのかな。

吉川●でも天津の公園で道に迷ったとき、おじさんが入口まで案内してくれそうだった。わかりますからってことわったけど。こんな人もまだいるんだなって。

槌田●店じまいの最中で、閉門まぎわだったでしょ。

角井●僕のようなボンクラ学生が、彼らにしたらすごい大金をもって中国にきている。ちょっとした小遣いで、むこうの人は何日も暮らせる。ちょっと辛かったです。

東川●「中国に絶望します」っていう青年もいたよ。「日本人にはわからないだろうけど……」って。外国人に接するから、そういう思いが強いんだろうけど。農村の印象はどうでした？

てたけど、そんなことはなかった。中國語ができないから、あまり話はできなかつたけど、人の温かさを感じましたね。

槌田●広かった。目に見える範囲がとにかく広いし、移動に時間がかかる。でも僕らがみたのはごく一部で、あれで中国を見た気になつたらだめだと思いました。

改革開放は進んだけど

糸●歴史も深いし、日本が戦争でいぶん悪いことをしたでしょ、そのことがずっと気になっていたんです。

槌田●目についたのは改革開放による進んだこと立ち遅れたこととのギャップのはげしさ。日本の高度成長に批判はあるけど、わりと平等に分配があった

気がします。ところが中国はそこがイビツ。一方で植林がおこなわれ、他方で急速な工業化による環境破壊がすすむ、その矛盾も感じました。

吉川●5年前、中国でいろんな人に親切にされたんです。ホテルで発熱したとき、夜中の2時にタクシーの運転手さんが病院につれていて世話をてくれた。今回、坂本さんが熱をだして、大同の国際旅行社の運転手が病院にいってくれたけど、態度がいまいち。

生活にふれたかった

吉川●私たちの会った人は幹部が多くて。もっとふつうの人と話したかった。徐町郷で村の人が周りにいたから子どもも話したけど、けっこう兄弟がいたりして。1人っ子政策もあそこまでは徹底していないのかな。農家に泊めてもらえば最高だけど、むこうの人はたいへんかな。

角井●西留郷にもつといたかった。散歩の時間もなかったからね。町を歩いておもしろかったけど、農村でもそうしたかった。

槌田●お客さんを案内するとき、僕らも生活の場はあまり見せないでしょ。興味本位にみるのがいいかわるいか自



ノロシ台のあるヤオトンの村。

槌田●列車も昼間の便で長城線がみれたらもっとよかつただろうな。

吉川●往きはよかったです、帰りは飛行機にして、その時間を作業にあてたらよかったです。

東川●中国でいちばん印象に残ったのはなんですか？

角井●中国はすごく騒がしいでしょ。日本は電車なんかも静かだけど、中国人は声も大きいし、たくさんそれをとりまいている。こどもがおばあちゃん



大同県徐町で樟子松を植樹

分でもジレンマだった。農村は保守的だろうから、しかたないのかなと。
桑●生活がきびしいでしょう。観光気分で行くのはよくないと思った。町で
あつた人とは身振り手振りだけ、通訳を通して聞いたのは幹部の話だけだっ
たから、農民が僕らをどう思っているか、昔のことをどう思ってるか、もつ
と聞きたかった。

国をあげての植林活動

東川●実際に見た植林のようすはどうでしたか？

角井●天津から北京までの道路脇もずっと木を植えてたでしょ。農村もまだ若い木がずっと植わってた。国をあげて真剣にやっているという感じ。

東川●誰もが年に何本か木を植えるというきまりがあるんですね。でも黄土高原では緑はまだまだ少ない。

吉川●私は「黄色い大地」の映画のイメージがあって、もっと殺伐とした風景を想像していた。だから、ああ烟もあるんだ、なんて思ってしまった。

角井●僕も荒涼とした大地にわざわざ出かけて植えると思ってたから、ちょっとちがった。烟も緑だったし。

作業のできる態勢を

植田●でも木の緑はほとんどなかったでしょ、あっても最近植えたのものだけ。日本とまるでちがう。それと僕らが行ったのが夏ってこともあるんじゃないかな。霜のないのは6月から9月まで、それ以外は草も育たないだろうし、冬は厳しいでしょうね。

東川●零下20度以下だって。

吉川●植林作業だけど、あらかじめ畝をつくって準備してあったでしょ。私たちはちょこちょこと植えるだけで、かえって迷惑じゃなかつたかしら。

大下●畝をつくる最初からやりたかったです。

植田●とにかく時間が短かった。僕らは端の畝を植えて、20人でもう15分あつたら終わつたのに、青年団の人が「帰ろう」と言いだした。まあ、日差しがきつかったけどね。日中は畳に誰もいなかつたでしょ。ああいう作業は朝早くか夕方しかしないはずですよ。地元の人からすると信じられない時間帯でしょ。

東川●村に泊まって、5時に起きて、やらなくっちゃね。

吉川●バスのなかでマントウかじってでもよかつたのにね。ハードすぎて病人でも困るか？

植田●地元の人といっしょに作業できなかつたのは拍子ぬけ。僕らのどこだけ区切つてあって、作業時間のズレからでしょ。草引きだけでもいいから、地元の人といっしょにやりたかった。

大下●官僚主義ってものも見つめましたと思うんです。案内の幹部と地元の人ではやっぱりちがうし。そういう意味で、言われるままじゃなくもっと主張すべきだと思います。はっきり言わないと、むこうもわからないし、変わらないと思うんです。

もっと植えたい、でも…

東川●生駒さんは、もっと大きな苗を植えたかったって。やっぱり植えた実

感がほしかったでしょう。

植田●行く前は大きな苗をこれは自分が植えたんだぞって感じで植えたかったけど、あそこに行つたら、大きな苗は無責任にさわれないって気がして。小さい苗だったら成長するの何割って見込んでるだろうけど。

桑●行ってすぐバッパッとやれるほど単純でもないと思う。ただ自己満足だけでもいけないんじゃないかな。木を植えるのは友好の象徴だし、そういう意味はあったと思う。むこうも実質的な労働力として期待してないだろうから。僕ももっと植えたかったけど、このツアーハイはこれでよかったと思う。

東川●こういうことをやってて、どうしても突き当たる問題なんですが、どう思いますか？

植田●むこうが迷惑でなければいいんじゃないかな、自己満足であつても、最初から成果だけ期待するとなにもで



北岳・恒山(画・山下通夫さん)

きないし。むこうが迷惑だったら、考え直さないといけないけど。

吉川●農繁期で、植林はオフシーズンだったんですね。接ぎ木とかはしてるけど、技術がいる。草取りとか農業の手伝いのほうがよかつたかな。

植田●でも草ははえてなかつた、トウモロコシ畠なんかでも、除草剤でも撒いたかと思うくらい。

プラスになったツアー

東川●そんなことのできる広さじゃないです。はえないんじゃないかな。

梶田●はえないんですか。そうかも知れない。農薬は高いだろうし、あれだけの広さを草取りできないし。日本の感覚ではわからないですね。肥料も堆肥を使うって説明だったけど、積んであるところ見なかった。いまはその時期じゃないということだったけど。日本とはちがう農業なんですね。

吉川●アンズの芽接ぎはどうでした？ やったのは糸君だけだったけど。

梶田●慣れたらできるのかな。

糸●できますよ、技術的にむずかしいわけじゃない。1分で1~2本はすぐできるでしょう。

梶田●アンズにはずいぶん期待してましたね。

吉川●乾したり砂糖づけにしたり。なかの種を漢方薬にするんでしょ。

東川●ジュースにもしてますね。収入的にも期待してるけど、計算どおりにいくといいですね。ところでツアーのその他の面ではどうでしたか？

「お客様」なんですね

角井●とにかく大いにされすぎた。ごちそうなくめて。たまには屋台で食べたかったけど。そうしないとふだんなに食べるかわからないし。僕は1人で1週間ほど残ったから、列のできる食堂の前に並んだりして、けっこうおいしかった。メニューはぜんぜんわからないけど、これって指さして。

梶田●21人の人にウロウロされると世話するほうはたいへんですけどね。わかってはいても、できないこともあると思う。

角井●劉さんに、屋台でいいって言ったんだけど、わざわざ日本からきた人に失礼だと考えたところもあるんじゃないかな。

梶田●そういうことがおもしろいのにな。でもそこは親切にまず感謝して、ということでないと。そこで不満をいだすときりがなくなる。

東川●日本式に「お気持ちだけいただきます」が通じればいいんですがね。

もてなしはありがたいけど、でも半分にしてほしいというふうに。

吉川●まだ日が浅いから、お客様にしかなれない。西留郷の農家でお昼をごちそうになったとき、女の子にいっしょに食べようって誘ったけど、お客様の席にはすわらない。そう教えられているんでしょうね。その垣根がとれるときが楽しみですけど。



内蒙古との境界にある万里の長城（宏賜堡）で。

角井●いろいろ出たけど、でも渾源県の県長さんと交流したなんてのもよかったですと思う。精神的なつながりがちょっとはできたから。

大下●作業面でいったら足手まといなのは最初からわかってたんですよ。それにも、あれは少なすぎた。たとえ自己満足だろうと、計画段階でもうちょっと考えてほしかった。

東川●自己満足もなかったということですね。台風で船が1日遅れて、現地でも雨で、そのぶん時間が短くなったり、帰りは飛行機にして、もう2~3日、現地の滞在を延ばすことを考えたいですね。

このツアーをきっかけに

吉川●このツアーに参加して、いろんな人とかよくなれて、これから自分にプラスになると思うんです。なに

かのきっかけになるツアーだった。

糸●高校のとき半年間だけだけど、空き罐集めの活動をしたんです。有志を募ったら10数人集まった。集めた空き罐をつぶす人がしたいに専門家になって、その人たちは意義を感じるんだけど、外の人は入りにくくなる。今回のツアーがよかったのは、専門家なんて1人もいなくて、誰もが自分のやれることをやったことですよ。

東川●今後こういうことをしたいということがあつたら聞かせて下さい。

角井●友だちにこういうツアーに行ってきましたって話してるんですけどね。

梶田●行く前から植えてくるぞって。でも帰ってからは、食事がうまかった（笑）。あの苗が大きく育てばいいななんてね。中国史やってて痛感するのは、見てる風景がいまどちがうんですよ。中国史やってても、たまたまそうしてただけで、中国そのものに関心がある人は少ない。僕がサハラに植林にいこうが中国にいこうが、あまり関心がない。悪意はないんだけどそれ以上の反応は少ない。

東川●好意的無関心でどこかな？

梶田●そう。環境問題が騒がれても、自分のこととしての実感が乏しい。僕のばあいも、別の視点で問題を考えるきっかけになればいいと思うんです。

大下●私なんか、友だちにまず聞かれたのがトイレのこと。きれいだったら行ってもいいと。やっぱりふつうのツアーといっしょに考えられているんですね。

梶田●話をとて悪いけど、農村のトイレに抵抗なかったですよ。むしろ有料トイレに違和感があった。こんなのが有料なんかと。それも場所場所でシステムがちがったでしょ。

大下●こんなのがあるんだな、おもしろいな、と。

梶田●農家のトイレは落ちたらどうしようって感じ。あれぐらいだったら、自分で上がれるだろうけど。

角井●ああいうのって好きだね。

（落ちつくところに落ちたところで終わりにします=編集部）

北海道の森林破壊とアイヌ民族

武田繁典 (高校教員・GEN世話人)

昨年末のGENの討論会で石原忠一さんから、93年は国連の世界先住民年なので北海道とアイヌのことを取り上げてはどうかという提案がありました。私は4年前に北海道を訪れ、森や自然を観察したり、世界先住民会議に参加したりしたので、今年8月、GENの活動として何ができるか調べることもかねて北海道旅行をしました。

札幌近郊に残る原生林、富良野の東

大演習林、阿寒湖畔の森林、アイヌの聖地と言われる平取町二風谷のまわりの山々などを見てまわりました。また二風谷に世界の11カ国、27の先住民族、約60人が集まって開かれた二風谷フォーラムにも参加しました。

次号で詳しく報告しますが、結論から言うと、GENの活動として取り組むに値する問題がたくさんあり発展性もあると思います。

例えば、明治からの森林大量伐採は、アイヌ民族を“旧土人”とした植民地扱いで、その後の海外侵略につながり、現在の“金”による東南アジアなどの森林収奪の原点ともいえます。私たちの中国黄土高原と同じ位置付けで活動が出来るでしょう。またあるアイヌの長老が提案している、ナショナルトラストによるアイヌの昔ながらの森づくりにも参加できるでしょう。アイヌの人々と交流し一緒にになって森づくりができたらすばらしいと思います。GENの今後の活動のひとつとして一緒に考えていいませんか。

草から紙をつくる —環境保護と企業

上田健一 (化学品専門商社勤務)

みなさんケナフをご存じですか？私も昨年就職し、仕事の関係で初めて知ったのですが、現在このケナフが森林資源の保護、さらにビジネスとしてもブームとなってきています。

森林資源についてみると、日本の森林面積は国土の約66%（90年）、意外に大きいと思いませんか。それに比べ日本の25倍の面積を有するお隣の中国では、森林面積はわずか13%。そのため紙の原料として、木材は全体の20%以下しかなく、残りは非木材60%と故紙約20%です。非木材というのは、稻わらや麦わらや竹、麻、ユーカリなどで、今までこれらを用いて紙の需要をまかなってきたのです。ところが現在のように急激に経済成長し、情報化が進展すると、紙の使用量も急激に増加し、89年にわずか13kgであった1人あたりの紙消費量が、アメリカ（304kg）や日本（223kg）に迫ってくるかもしれません。そうなると世界的な紙資源の危機にもなりかねません。

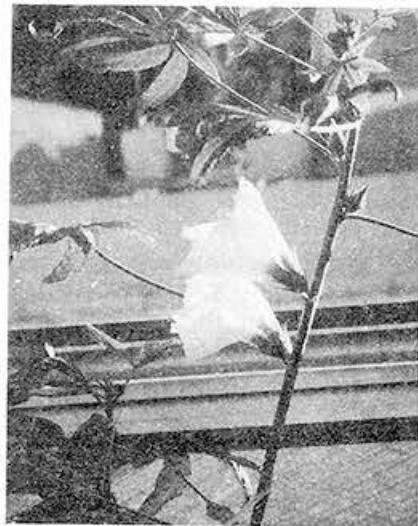
そこで木材や他の低収量の非木材に代わり、さらに収量や環境適応能力も高い代替資源が求められ、3000種もの非木材資源を調査研究し、パルプとしての特性などからもこの「ケナフ」が最適植物として選ばれたのです。現在

では中国やタイ、アメリカなどで栽培され、特に中国では日本との共同出資によりケナフパルプ用の工場の建設が進められています。

まったく個人的にですが、私も自宅の庭にケナフの種を蒔き、栽培を始めたところ、播種後1か月ほどで腰のあたりまで育ち、今後さらに数か月で3～4m、直径5～6cmの大きさに育つということなので、小さい庭のことを考えると少し心配です。

さて、ここで辞書的にケナフの特徴を記しますと、ケナフは熱帯から温帯の広い地域で栽培され、古くから外皮の長纖維を利用して医療やカーペットの基布として利用され、また種子からは油を取り、その搾り粕は家畜の飼料や肥料になってきました。さらに茎の纖維質や硬さが木に似ているうえ、1年という短いサイクルで1haあたり50t以上の収量が期待できる、など優れた特性を持っています。

最近では前述のような森林資源の保護と人々の環境に対する認識の高まりから、企業もこの動きを狙い、現在、他の木材等に比べ価格が高いにもかかわらず、ノートや包装紙といった身近なものを中心に利用され始めています。私自身企業の人間として、また環



クリーム色の花をつけたケナフ。

境保護に携わる立場からみても、人々の認識の高まりを感じています。実際このケナフについて、1年ほど前には価格的にみてまだ難しい商売だと感じていましたが、高くても消費者にアピールできるものをメーカーが求めるようになり、利用の幅も広がってきています。またPETボトルやポリ容器が、紙パックやフレキシブルパッケージ（プラスチックフィルムなどの柔軟な原料を使う包装）に変化したり、生分解性（廃棄後、完全分解され環境に調和する）プラスチックの利用が進められるなど、これらも草の根的な声によるものだと思います。

このGENの活動も実際に黄土高原等で植林する以上に、環境を守る意識の高まり、そして声を生み、さらに企業をも動かしていくことになると感じています。

山西省の自然

石原忠一
(92年緑化協力団団長)

⑬カササギ (鶲・学名 Pica pica)

山西省の田園地帯を旅しますと、屋敷の周りの高い木の上に、枯れた小枝を集めて作った1メートルもある球形の巣がかかっているのを見かけます。横向きの入口があって、ちょっと長めの尾羽の先だけを出して抱卵していました。オスメスでさかんに育雛をしてい

るのに出会うこともあります。

なにしろ目立ち屋で学名の Pica も英名の Magpie もまだらを意味する語源をもっており、つやのある黒い全身に、肩と腹と飛んだときの翼の色が雪白色なのですから、野外でのマークとしてはこれほど目をひくものはありません。それにもまして、ショットチュウ活発に翔んだり、地上や屋根の上を歩いたり跳びはねたり、にぎやかに鳴いたりしますから、日本からの旅人の耳目をひきつけ、「所変われば品変わる」の印象をとても強く残すものです。

また日本人には、古く

からまだ見ぬ伝説的な鳥として七夕のときの天の川に橋をかけるとか、宮殿を天空に見立てて前庭からのかけ橋を「かささぎの渡せる橋」と呼んだりしていたのですから、文学的に想像していた鳥を初めて見た人の感激もひとしおといえるでしょう。

ところがこの鳥の分布は、ユーラシア全域ときわめて広く、よく目立つ賢い鳥ですから、それぞれの国で伝説をうみました。ヨーロッパでは鳴き声を嫌って不吉な感じととらえ、「ノアの方舟」に乗らず、溺れた人々を嘲笑したとか、スウェーデンでは、魔女は外出する時かささぎの姿に変身している、などといわれます。中国ではむしろ吉兆とされ、特に朝鮮では家のそばでこの鳥が鳴くと親しい人が訪れる吉報であるとされ、韓国の国鳥に指定されています。

わが国にも佐賀県を中心に筑後平野の田園地帯にいて、国の天然記念物にされています。



ボプラにかかるカササギの巣。

「地球はほんとに危ないか?—真説・環境問題入門」を読んで

岡田光司 (GEN世話人)

通っている英語学校のアメリカ人教師から最近、質問を受けた。

「人類はいつか滅亡するか?」

即座に「もちろん」と答えた。

彼は「やっぱり」とうなずいた後、したり顔で、日本人論を続けた。

「多くの日本人に同じ質問をしたが、ほとんどの人が滅亡すると答えた。アメリカ人なら、ほとんどの人が滅亡しないと答える。科学技術が進歩したら火星にだって住めるかもしれないし、公害だって解決できる。日本人は悲観論者が多すぎる。アメリカ人のように楽観的な考え方ができるのか」と言う。

も思える。

彼のていでいくと、この本は「悲観論者日本人」を象徴するような本だ。

著者は最後に「欠陥脳をもったがゆえに文明などという余計なものを築いてしまった生物種が、石油という優秀なエネルギー物質に遭遇し、その利用に狂喜しているうちに文明を終焉させる事態を招いた。いいじゃないか、それで。地球史の上では瞬間芸みたいなものだ。人類はこの終焉期の文明をどう構築するか考えればよい」と結ぶ。

「人類は滅亡する」と答えたくせに、この超悲観的な著者にも同調でき

ない。そして、超樂観的なアメリカ人教師にも同調できない。両極端の間で、環境問題に前向きに取り組んでいこうと思う。

本文では、無農薬神話の偽善、わりばし論議、プラスチックとの共生、熱帯雨林破壊などについて、著者が集めた科学的根拠をもとに独特的の考えを披露している。最後の章では人間の脳が欠陥品であることを証明するために最近はやりの「ニューロン」や「ドーパミン」にまで言及している。著者の考え方は別としても、面白い本だ。

・発行 勝光文社 カッパサイエンス

・著者 北村美遵 (……よしゆき)

・書名 「地球はほんとに危ないか? 真説・環境問題入門」

・定価 790円